

今年の教区の目標

交わり深め 力あわせ
救いのおとずれ広げよう

〒902-0067 那覇市安里3-7-2

カトリック那覇教区本部

TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人 W.F.バートン司教 1部40円

<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2022年8月1日 (毎月1日発行)

カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第765号 (8月号)

2022年平和旬間 日本カトリック司教協議会会長談話 8月6日～15日 「平和は可能です。平和は義務です。」



平和が暴力的に踏みじられた年になりました。いのちの尊厳がないがしろにされ、その保護が後回しにされる年になりました。

わたしたちは、二〇二二年の平和旬間を、また新たないのちの危機の現実の中で迎えます。二年以上にわたる感染症の脅威の中で教皇フランシスコは、いのちを守り、その危機に立ち向かうには連帯が不可欠だと強調してきました。二〇二〇年九月二日には、この危機的状况から、以前よりよい状態で抜出すには、「調和のうちに結ばれた多様性と連帯」が不可欠だと呼びかけています。

しかしながらこの半年の間、わたしたちの眼前で展開したのは、調和でも多様性でも連帯でもなく、対立と排除と暴虐でした。

感染症によるいのちの危機に直面する世界では、戦争こそしてはならないはず。しかし、

世界の指導者たちの考えは、わたしたちとは異なるようです。

ウクライナへのロシアの武力侵攻は、平和を求めてこれまでに積み重ねてきた国際社会の努力を踏みにじる大国の暴力的行動として世界に大きな衝撃を与えました。そして、いのちを守り平和を希求する多くの人の願いを顧みることなく事態は展開しています。

感染症の状況の中で、わたしたちは互いに支え合うこと、互いのいのちを思いやること、つまり連帯して支え合うことこそが、いのちを守る最善の道であることを体験から学びました。平和とは、単に争いがない状況のことではなく、争いが起こりうる社会のさまざまな要因を取り除き、互いが支え合いつながりのいのちを生きる状況のことです。

しかし戦争によって暴力的にいのちを奪われる多くの存在に触れ、その理不尽さに心が打ちのめされるとき、わき上がる恐怖と怒りは、思いやりや支え合いを、感情の背後に追いやってしまします。今世界は、暴力によって平和を獲得することを肯定する感情に流されています。しかしそれは、真の平

和を踏みにじることにしかならいせん。

今年の復活祭メッセージで、教皇フランシスコはこう呼びかけました。

「どうか、戦争に慣れてしまわないでください。平和を希求することに積極的にいかかりましょう。バルコニーから、街角から、平和を叫びましょう。『平和を！』と。各国の指導者たちが、人々の平和への願いに耳を傾けてくれますように」。

(二〇二二年四月十七日)

同時に、戦争という事実があまりにも大きい力をもっているため、その陰で、多くのいのちの危機が忘れ去られています。さまざまな理由から祖国を追われ避難の旅路にある人たち、経済状況からいのちをつなぐことが難しい人たち、政治や信条に対する迫害からいのちの危機に直面する人たち——。

こうした、長年にわたって放置されている人間のいのちにかかわる課題も、世界には山積しています。わたしたちの周囲にも、法律の狭間で翻弄されながら助けを求めている人はいます。神から与えられたたまものであるいのちは、その始まりから終わりまで守られなくてはなりません。互いに支

え合ってこの共通の家で生きるわたしたちは、「人間のいのちと、地球上のあらゆる形態のいのちを守ることが求められていることを認識し、エコロジカルな正義を推進しよう」求められています(ラウダート・シ目標二)。

平和旬間を迎え、わたしたちはさまざまな角度から平和について学び行動する時を与えられています。「すべての戦争は全人類に影響を与え、死別や難民の悲劇、経済危機や食糧危機に至るまで、さまざまな後遺症をもたらします」。そう述べたうえで教皇フランシスコは、復活祭メッセージを次のよう呼びかけで締めくくっています。「兄弟姉妹の皆さん、キリストの平和において勝利を収めましょう。平和は可能です。平和は義務です。平和はすべての人が責任をもって第一に優先するべきものです」。

皆さん、この平和旬間に、暴力によらない平和は可能だと、連帯こそが平和を生み出すのだと、あらためて声を上げ行動しましょう。

二〇二二年七月七日
日本カトリック司教協議会会長
カトリック東京大司教 菊地功

Miyako Church



Futenma Church



Oroku Church



Maehara Church



Yonabaru Church



Awase Church



Kainan Church



Catholic Bunka Center



Shuri Church



TOGETHER WE the global campaign launched by Caritas International with its slogan “Act Today for a better Tomorrow”. Integral Ecology is the main focus of this campaign. The fact, that we are all connected to each other and to our common home, the earth. Inspired by Laudato Si and Fratelli Tutti, the Holy Father invites all of us to bring people together, to carry out new actions and initiatives specially at the grassroots level combatting poverty, restoring dignity to the excluded and protecting nature in accord with integral ecology.

We at Caritas Naha launched our own way of building our community of care even before this campaign was launched. Our churches have opened our doors extending beyond our Faith Community. It was our response to the needs brought about by the Pandemic. I remember the statement mentioned by a person in charge of the social welfare in Naha City. “I didn’t know that the church is open to everyone” she said. I couldn’t respond immediately at that moment. But I know and believed that it was Jesus himself who taught us to welcome everyone, as we go along the way, reaching our sisters and brothers through the little contributions from each of the churches as well as their participation by extending outside the Faith community.

I am confident that, We in the Diocese of Naha will be able to actively participate with this new Caritas Campaign “TOGETHER WE”. We can express and extend our friendship once again beyond our own Faith community.

Let’s join and work together, during the three year fold Caritas campaign by working together in dialogue with people even outside our Faith. Acting today to create a culture of care and initiate ideas on how to care for our common home. As the need arises, the hand that is able to reach will also multiply just like the parable of the multiplication of the loaves. It is the miracle of love that God have manifested to all those sitting, while everyone took their part to share. I believed that story manifests itself to each of us for wherever and whenever need arises, humanity get together to share and help each other.

We are thankful to the participating churches above for their continued support in reaching out to our sisters and brothers in the different social welfare and citizens group.

As Saint Teresa of Calcutta said “it is not a matter of how big you gave but it is how much love you put into it that matters”.

Mercy Cristobal
Diocese of Naha - Caritas Japan Coordinator



アヴェ・マリア、

恵みに満ちた方

ヨアキム・ホアイ神父

宮古島平良教会 主任司祭



昇天の聖母に捧げられた教会です。守護の聖人としてお祝いしました。他にも、多くの人々がこの日を特別な日としてお祝いし、お祈りするでしょう。

私は、聖母マリアの被昇天がすべてのカトリック信者の希望の光であることを信じています。

アは天使ガブリエルから「マリヤ、恵みに満ちた方」と挨拶され、神の子の母になりました。すぐに、マリヤの心は喜びで満たされ、洗礼者ヨハネのお母さんエリサベトを訪問されました。その機会にこそ、素晴らしい「マグニフィカト」という賛歌を歌われたのでした。

私は神をあがめ、私の心は神の救いに喜びおどる。

神は

卑しいはしめを顧みられ、

いつの世の人も、

私を幸せな者と呼ぶ。

神は私に偉大な業を行われた。

(ルカ一・47-49)

確かに神はマリヤに偉大なことを行われただけでなく、マリヤを通して救いの計画を実現されました。

さらに、教会の母であるマリヤ。

主のお告げを受けた後、マリヤはイエスをお生みになり三十年の間、ヨセフといっしょにイエスを育てました。それから、マリヤはイエスの宣教旅路を見守りながら、ずっとイエスに従われました。ヨハネの福音書によれば、イエス処刑の地ゴルゴタの丘で、イエスの十字架の下

にマリヤはイエスの愛する弟子ヨハネと共におられました。その時、十字架からイエスは母マリヤに向かって「見よ、あなたの子です」。そして、ヨハネに向かつて「あなたの母です」と言われました(ヨハネ一九・25-27)。そのおかげで、マリヤは新しい役割を担って、誕生した教会の母になりました。

特に、被昇天の恵みを受けるマリヤ。

マリヤの生涯を黙想するとき、私たちはよくマリヤに、神からの恵みを見るでしょう。神の母であり教会の母であるので、イエスの永遠の命にあやかっ、被昇天の恵みを受けられたのです。マリヤが魂も体も天にあげられることは当然のことではないでしょうか。

聖母マリヤが天にあげられたように、私たちすべては、最後の時に体が復活の栄光に与えることを確信し希望したいものです。聖母マリヤと私たちの違いは、マリヤは復活のために世界の終わりで待つ必要がないということです。マリヤは無原罪の中に生まれましたが、私たちは罪をもつて生まれたからです。しかし、マリヤの取次によって、マリヤの模範に習い、私たちも

永遠の国に入ることができるのです。

私は聖母の被昇天を黙想している間、ごミサの奉献文で聖母マリヤの生涯という、私にとつて深く大切な感謝の祈りを思い出します。その祈りは次のとおりです。

「神のお告げを信じ、御言葉を受け入れたおとめマリヤは救い主の母となり、十字架のもとでイエズスことばを受け、キリストによって新しく生まれるすべての人の母となりました。また約束された聖霊を待つ間、使徒たちと共に祈り、祈る教会を示しました。天の栄光にあげられたマリヤは旅する教会を母の愛を持って見守り、神の国の完成の日まで私たちを導かれます。」この祈りには、神に対するマリヤの全くの信頼、その生涯の役割や使命などが描かれているのです。

私は、被昇天されたマリヤ様がいつも私たちのために神に恵みを取り次いでくださることを信じています。被昇天を祝いながら、私たちはマリヤ様の保護と愛のうちに希望をもつて、この世の旅路を歩み続け完成することができまうように祈りましよう。

毎年八月十五日は聖母マリアの被昇天の祝日です。日本カトリック教会では、この日を大切にお祝いし、マリヤ様にかかわる出来事を記念していろいろなイベントを行います。例えば、一五四九年、聖ランシスコ・ザビエルが鹿児島へ上陸した記念日。八月十五日で、日本の教会をマリヤ様に捧げました。一九八一年には教皇ヨハネ・パウロ二世が来日され、平和アピールを出されたことから、八月六日から十五日までを「カトリック平和旬間」とし、平和のために祈ることが定められました。私が勤めていた首里教会でも、被

私たちはどのように聖母マリアの恵みに満たされているかを理解するために、聖母マリアの生涯を見て黙想したいと思います。

まず、神の母であるマリヤ。謙遜と無条件に自分を神にゆだねたマリヤは、神の心に従って生き、救い主の母になりました。ルカによる福音書にあるとおり、主のお告げの時に、マリ

2022年7月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2022年7月5日(火) 10:00～12:00会議前に聖体賛美式をボスコ神父が主式して行う。

1. 報告及び連絡事項：始めの祈りはウェイン司教、司会はマキシム神父が担当。

- ・ 前回(6月会議)の議事録の確認を新田が行い、承認された。
- ・ ウェイン司教より6・23沖縄慰霊の日の報告が行われた。報告に先立って、ウェイン司教と津波古事務局長は大分で行われた森山新司教の叙階式に参列して帰省し、PCR検査を受けての結果が本日わかるので、会議中少し距離を保って会議に参加する旨の報告があった。6・23に関しては前のように「平和巡礼」が行えないかといった要請もあったが、コロナが完全に落ち着いたわけではないとの判断から、今年も分散開催とすることを司祭会議でも確認して臨んだ。来年以降は巡礼に向けた取り組みも進められるのではないかと希望を持って、若い司祭たちに積極的に関わってもらいたいとの、司教からの要望が述べられた。その後、司教の求めに応じて、各小教区での取り組みが、主任司祭たちによって報告された。
- ・ サマー・キャンプについて、担当のナビーン神父から報告が行われた。7月17日が参加申込みの締切日となるので、主任司祭たちにはキャンプに参加する子供たちとヘルパーの参加者名簿を作成して報告いただきたい。今回は宿泊を伴わないデイ・キャンプとなるので、BBQ等の費用は教区が負担するが、ヘルパーも含め、人数の把握が大事になるので、期限内に報告されるよう、重ねて要請が行われた。
- ・ 外国籍の司祭たちの休暇の取得について、ウェイン司教から要請が行われた。休暇の取得は認められた権利でもあるので、大いに活用していただきたいが、複数の司祭が同時に休暇を取得してしまうと教会運営に支障をきたすことになるので、司祭間でお互いに調整して取得するようにしてもらいたい。また、PCR検査の結果を待つ間の待機期間も考慮して、休暇の日程を作成するよう協力が求められた。
- ・ 大分教区で行われたスルピス森山新司教の叙階式について、津波古事務局長とウェイン司教から報告が行われた。式は民間の会場を使い、1200名収容が可能なホールに、参列者は約半数を入れて、コロナ禍へも配慮して行われた。日本の16司教区のうち、司教不在となっていた最後の教区でもあったので、久しぶりに司教団全員揃う叙階式となった。新司教は福岡教区出身で、小教区での司牧を経て、福岡コレジオで神学生志願者たちの指導司祭を勤め、中央協議会で事務局長の重責も務めてこられた。有能でタレント豊かな司教であるので、今後の活躍を期待したいとのウェイン司教からの言葉とともに、新司教が選んだ紋章についての説明も行われた。

2. 審議事項

- ・ 司祭たちの休暇の取得について再度確認が行われた。修道会の司祭たちは修道会の長上と相談して調整すること。ベトナム人の教区司祭たちは司教と調整するよう要請があった。基本的に外国籍の司祭たちは1ヶ月の休暇、邦人司祭たちには1～2週間の休暇をお願いしている。先にも話した通り、休暇は是非取得して欲しいが、不在中の小教区のミサ時間や代わりをお願いできる司祭の手配も調整して休暇に臨むよう要請が行われた。
- ・ 感染症の状況については、落ち着いてきたようにも見える一方で、まだ分からない部分も多く、基本的な予防策徹底を継続するよう協力要請が行われた。マスクの装着や手指の消毒、検温は日曜日のミサや、信徒が複数で集まる祈りの会等では徹底されるよう要請があった。
- ・ 7月の司教予定について、マーシーさんから報告と調整が行われた。7/3は大分教区での司教叙階式に参列。7/10、与那原にてシスターたちへの講話。7/17、安里教会のミサを司式。7/24、東京で会議。7/30、サマーキャンプ視察。7/31、安里教会のミサを司式。
- ・ 待降節第一主日から導入される新しいミサの式次第について、「光明社」から簡易版が求め易い価格で販売されているので、各小教区で導入を検討されてはどうかとの提案が事務局から行われた。入手方法については、カトリック文化センターを通して購入することが提案、了承された。
- ・ 教区報と同じく、平和委員会もメンバーの高齢化が見られる。この活動に若い人達をどう取り込んでいくかを教区全体の課題として考えていく必要があることを司教は喚起された。
- ・ その他
- ・ クレーバー神父より、与那原の修道会のシスターコレッタ仲本常子の帰天が報告され、お祈りの依頼が行われた。

(5ページ下へ続く)

教区の日の行事の一つである金婚の祝賀ミサにあずかった。私たちは金で飾るほど晴れやかな結婚五十年ではないし、照れくさくて、できることなら遠慮したかった。結局は参加することになったが、ミサの中でウェイン司教のお言葉に触れたとき、心奥に響く感動があり参加して本当に良かったと思った。お言葉は、結婚生活の苦楽や信仰生活を守り通す困難さにも触れられ、真に結婚生活者への理解と共感を示すものだった。

結婚五十年の節目にあたつて、来し方を顧み行く末を望むことは、有意義でありいい機会でもあらう。思い起こせば、二十歳前後の悩み多き青年期には「人間いかに生くべきか」で先達の人生論を好んで読み、琉球大学のカトリック研究クラブではキリスト教をかった。あれやこれや考え抜いた末、尊敬する粕谷甲一神父の人格的魅力にひかれ、その著書『運命と信仰』昭和三十七年、ユニバーサル文庫に導かれて洗礼を受ける決心をしたのだった。二十二歳の復活祭の日だった。あれから五十九年。

よくここまで来れたものだといふくづく思う。健康面であり自信がなかったからである。これまで入院経験が婚前も含めて五回もあり、その都度困難を乗り越えることができたものの、若き日に端を発する二つの大きな持病(鼻と腰)は今もって根治せず、不調をかこ

ちながら今日に至っている。

さて、結婚とは何だろう。あれほど夢見た結婚だが、果たしてその夢はどれぐらい実現しているだろうか。よく言われるように結婚というものは、「美しき誤解」から出発するものと思うことがある。多かれ少なかれ相手を美化して見ているロマンス時代は、多分に浮かれていますから美点ばかりが膨らんで見え、欠点は(あるはずだが)目に入らない。ところが、

かったのに」と呟いたり、溜息を漏らすことが無くなったわけではなかった。順風満帆とはいかないものだ。

一方、ひそやかな喜びもあった。保育所送迎の車の中で子どもに童謡を歌って聞かせたり、家で入浴させるときなど、その愛らしい表情や仕草を見て感極まり、思わず即興の詩曲(むろん駄作)を弄したこともあった。思うに、夫婦は子育てを通して命の尊さを学び、愛する喜びを知り、日々の生

たて軸よこ軸

結婚五十年

よりよい人生をめざして

安里教会 ヴィンセンチオ・パウロ 松本 淳^{じゅん}

結婚生活が始まり、やがて育児や教育のことなどで現実の厳しい局面に立ち至ると、互いに本性? エゴ? というか不協和音によって摩擦や意見の対立が生じ、協調や一致に困難を感じることも少なくなかった。そんな折、ペトロ神父

のお声掛けでマリッジ・エンカウンターに参加し、後日、不肖私たちが夫婦もそのチームカッブルを務めたこともあった。よい家庭づくりと夫婦の成長に役立つと思っただけである。しかし、このような特別な努力を払ったとはいえず、「ああ結婚ってこんなはずじゃな

きる力やエネルギーを得ているのであろう。子どもは宝物。人生の喜怒哀楽の中で、夫婦をつなぐ「かすがい」となっているのは否めない。結婚の誓約もキリスト者には神との関係で「かすがい」として作用しているだろう。

自然界の生あるものはみな生かされて生きている。その中で人間だけが精神的能力を持つ。だから、人は「ただ生きる」だけでは駄目で、「よく生きる」ことが大事だ。既によく生きているならば、更に「よりよく生きる」ことが求められる。この比較級の「創造的生

き方」を私は大切にしたい。そして、よりよく生きるためにはより確かな道しるべが必要となり、それを示してくれるのが他ならぬ神なるキリストだと私は信じる。キリスト教に入信してとうに半世紀が過ぎた。私は何を会得したのだろうか? 霊的にはどれだけ成長したのだろうか? これといって自覚できるものは何もない。ただひたすら神の恵みの尊さ・有り難さに感謝し、その憐みを乞い、頭を垂れるのみだ。随喜の涙もたまには経験する。

仕事の面では、思い残すことなく精一杯やってきた。公務員一筋の三十六年間は、県の福祉行政を振り出しに人事・研修、広報・統計、芸術・文化、平和行政及び大学行政などを担当・歴任した。とりわけ『平和の礎』の創設に深く関わったことは、忘れられない。

他方、信仰の面では、三人の子さえ信仰の道に導くこともできず、親の非力を嘆くばかりだ。子どもたちは自我の芽生えとともに、いつしか教会から遠ざかっていく。子どもたちが幼少期だけの聖家族。でも銘々の人生だから尊重しなければならぬ。きつと神様がよきに計らってください。そう信じてすべてを委ねよう。

少し大げさだが、花も嵐も踏み越えてきた私たち。老後は、キリストを杖とし灯としてゆつくり余生を味わいたい。

- ・名護のマイケル神父から小教区60周年記念誌の贈呈が行われ、名護教会のためにも引き続きお祈りくださるようお願いが行われた。
- ・日本の教会では福音宣教を優先する観点から、信徒でない場合でも結婚講座を受講してから、教会で結婚式を捧げることができるとしている。沖縄での結婚式を望む若い世代も多いので、教会としても門戸を広くして、未信徒の方々が教会と接点をもつきっかけを積極的に提供して欲しいと要望がウェイン司教から伝えられた。
- ・教区シノドス前会議のまとめの活用や、日本の16教区の報告が出揃ったら、シノドス前会議で出された意見を読み合わせて、話し合いの場を持つなどの取り組みができれば良いと考えていることが司教から報告された。
- ・次回拡大司祭・助祭会議は2022年8月2日(火) 午前10時から12時、安里教区センターで行なわれることが報告された。

教区 NEWS 教会

第五十三回サマーキャンプ 小学生の部

台風五号も過ぎ去り、天候と穏やかな波に恵まれ、第五十三回サマーキャンプ小学生の部が、七月三十日（土）盛会裏に終了しました。

当日前より、男性の方の草刈り周辺大掃除、女性の会による建物内の大掃除と、たくさんのご協力をいただきました。

三十日当日、小学生の子供達



司教様、神父様たちと感謝のごミサ

二十三名を中心にウエイ
ン司教様のミサをはじめ、マキシム神父様のお話、神父様方八名のご参加、青年会のヘルパー、

美味しい料理を担当してくださった女性の会の皆様、ヘルパー及び集いを見守ってくださった三十五名余の方々、大勢の暖かい雰囲気の中、滞りなく会は進められました。

楽しい水泳の時、思いがけなくもミッシヨンビーチ管理の方のご好意で、バナナボートのスピード感溢れる水上スキーを楽しませていただきました。

コロナ禍、台風情報の中、実現も危ぶまれたサマーキャンプでしたが、教区の皆様の暖かい協力のおかげで、参加した子供達に信仰の喜び、教区の皆さんと関わる喜びを体験させることができました。感謝致します。

八月六日中高生のサマーキャンプが予定されていますが、再び皆様の暖かいご協力をいただき、有意義な集いとなりますよう祈念いたします。

神に感謝！子供達、関わってくださった皆様に感謝！青少年担当者としてお礼申し上げます。

二〇二二年七月三十日（土）

青少年担当
ナビーン・ジョセフ・セクウェラ神父



サマーキャンプ前大掃除（2022年7月23日：男性の会 24日：女性の会） たくさんの方の参加のおかげで大掃除もあっという間に終わることができました！参加して下さったみなさんご協力ありがとうございました！神様にすべてを委ねて子どもたちにとって、実りのあるサマーキャンプになりますように事故や怪我もなく無事に終わりますようにお祈りお願いいたします。



サマーキャンプ、小学生：7月30日

2022年 第53回 那覇教区 サマーキャンプ



カトリック文化センターからセールのご案内

日頃からカトリック文化センターをご利用いただき誠にありがとうございます。
 この度、当センターでは8月2日(火)から31日(水)＜月曜日と祝祭日は除く＞の期間、
 書籍、CD、委託品を除く、聖具類の10%オフセールを開催いたします。
 皆様のご来店を心よりお待ちしております。
 尚、感染症予防にご協力いただきますよう合わせてお願い申し上げます。

カトリック文化センター 〒900-0005 那覇市天久1-8-7 電話・FAX098-868-4649

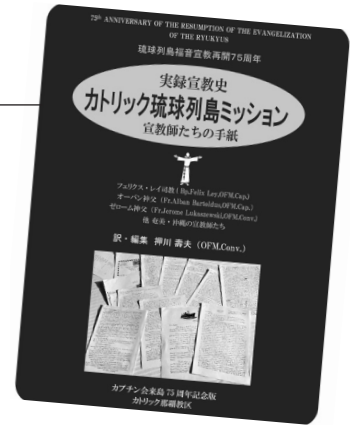
宣教師(カプチン会士)来島 75 周年記念ミサ

日 時：2022年 9 月 4 日(日) 午後 2 時～

主 式：ウェイン・バート司教

押川壽夫名誉司教共同司式

場 所：カトリック安里教会聖堂



9 月 5 日のレイ司教、オーバン神父来島 75 周年を前に、両師を記念し、ミサと写真展を開催いたします。『カプチン会来島記念感謝ミサ』を捧げて、神様への感謝と戦後の再宣教を振り返り、今後の教区の歩みへの指針を求める集いにできればと思います。尚、押川壽夫名誉司教様の翻訳による、「実録宣教師・カトリック琉球列島ミッション・宣教師たちの手紙」も近日出版される予定です。

訃 報

御心のマリア・ヨゼフィナ 平良邦子修道女

(女子洗足カルメル修道会福岡修道院長)

2022 年 6 月 12 日帰天 享年 58 歳、泡瀬教会出身。38 年の修道生活でした。

訃 報

◆与那原教会

テレジア 与那原正子様

二〇二二年七月十日帰天

享年八十八歳

マリア 諸見里敏子様

二〇二二年七月十九日帰天

享年九十歳

ローザ 津嘉山絹子様

二〇二二年七月二十日帰天

享年七十九歳

◆開南教会

マルガリタ・マリア 新田雅子様

二〇二二年七月二十日帰天

享年九十三歳

◆コザ教会

マリア 與那嶺魅河子様

二〇二二年七月二十七日帰天

享年五十歳

NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーションクララ



TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)

・営業時間 8:30～17:30

・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



葬祭の
「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里烏堀町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>

E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

*創業30数余年・・・。

*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。

*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひ が たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく
☎098-853-1059

